

におさめるために、私が「である」調に文章をつめた。討論にいさか、ぶつきら棒の感があるのはもっぱらそのせいである。

今年の共通課題である「村落生活の変化と現状——農民にとつての“生活破壊”とは何か——」も、今度の研究会あたりからそろそろ定着してきた感じである。“生活破壊”ということばについては、これまでいろんな視角から、多くの方々が意見を述べて下さった。

大会前におそらくテーマの表現をめぐってこれほど議論が活発に行なわれたことは近來にないことではなかろうか。一時は收拾がつかなくなるのではないかと思うほど、多岐にわたる見解が出され、そのたびに事務局は東奔西走、はたまた右往左往した。これも本年度の大会を成功させたいという会員の意欲の現われと考えたい。山形、そして京都の研究会では提案者の意図とはかなり異なる視角からの議論も行なわれた。しかし、もし、あの二度の研究会がなければ、大会の時にまずあのような“生活破壊”的規定をめぐる議論が出て、次第によつてはそれに終始することになつたかも知れない。その意味で山形と京都での研究会は布石としての役割を十分に果したといえよう。とにかく何かもやもやがふつ切れた感じがする。

ところで、前事務局の高橋明善会員より、「1. 世界農村社会学会議訪問ならびにヨーロッパ旅行の件は希望者が二五人に満たぬため取りやめになつたこと、2. 同会議に出席する日本代表は、同会議アジア地区会員の選挙により役員に選ばれた人ということで、二宮哲雄氏に決定したこと」の二点の連絡があつた。

最後に、共通課題に多数の報告希望者の応募されることを期する。

編集後記

今回は東京での研究会を収録した。原稿作製にあたつては、宿主の長谷川宏二会員をわざわせた。感謝申し上げる。ただ、三〇頁